

日本説話「鉢かづき」にみる鉢の意味

千野美和子

I、初めに

ここで取り上げる「鉢かづき」は、『御伽草子』に収められている話で、室町期に成立し、江戸時代にかけて広く流布した話である（稲田ら、1994）。母が死ぬ間際にかぶせた鉢が取れなくなり、そのおかげで家を追い出され辛い目に遭うが、身分の高い男性に出会い、鉢が取れて中から財宝が出てきて幸せになるという話である。また、昔話では「鉢かつぎ」という名で知られており（稲田ら、1994）、稲田は昔話の一つのタイプとしてこの話を挙げている（稲田、1988）。御伽草子と昔話との関連について、稲田ら（1994）は、『御伽草子』が民間説話を素材として成立した一方、逆に語られている昔話に影響を与えた可能性について触れている。

ここでは、『御伽草子』の「鉢かづき」を、昔話「鉢かつぎ」の一つの話ととらえて、昔話の視点で考察する。

筆者は女性が主人公である日本昔話を取り上げて、女性の心の在り方について考察してきた。「鉢かづき」の主人公は、母の死後、鉢をかぶった姫として生きていかなければならなくなる。母のかぶせた鉢が姫にさまざまな受難を与えつつも、最終的にその鉢のおかげで幸せになる。この鉢とはいったい何なのか、その意味について探りたい。

まず、稲田の挙げる昔話のタイプから、この話の特徴を明らかにする。さらに他のタイプの昔話との異同を検討する。次に女性の心の在り方という視点で心理学的解釈を試みる。この視点では、ユング心理学の立場から、ユング派分析家の織田（1993）と豊田（2015）の解釈がある。織田（1993）は「新しい視点による女性の心の発達仮説」を提唱し、その第5段階として「鉢かづき」の話を取り上げている。豊田（2015）は女性のスピリチュアリティという観点から、「鉢かづき」を解釈して、娘にとっての「良い母」の意味について論じている（註1）。ここでは、二人の解釈を踏まえながら、物語のプロセスを心理学的に見ていき、特に「鉢」についての心理学的な意味について考察したい。

II、話のあらすじ

少し昔河内国交野に備中守さねたかという人がいた。たくさんの財宝を持ち、満ち足りた生活をしていたが、子どもがいないことを悲しんでいた。そこに姫が一人生まれた。父母の喜びは大きく、かねてから信仰していた長谷観音に参詣して姫の幸せを祈っていた。

姫が13歳の時に、母が病になった。母は死ぬ間際に、観音の示した通りに、重そうな手箱を姫の髪の上に載せその上から肩の隠れるほどの大きな鉢をかぶせて亡くなった。母の死後、父が姫のかぶっている鉢を取ろうとしたが、取り外すことができなかった。

しばらくして父は再婚し、新しい母がやってきた。継母は姫の姿を見て憎んでいたが、子どもができてからは、一層姫のことを悪く言った。鉢かづきは母の墓に行き自分の身の上を嘆いた。それを聞いた継母は父や継母親子を呪っていると父に嘘を言った。父は怒って、鉢かづきを家から追い出した。

鉢かづきは足にまかせて歩いていると大きな川のほとりに来た。母のいるあの世に行こうと川に身を投げたが、かぶっている鉢のために沈むことができず、流されていった。流れてくる鉢かづきを船頭が引き揚げて川岸へ投げ上げた。再び歩いて行くと里に出た。里人は、鉢かづきを見て、化物だと恐ろしがったり笑ったりした。

そうしているところへ、その地の国司である中將が鉢かづきに目を止めて、事情を尋ねた。不憫に思った中將は、鉢かづきに湯殿の火を焚く仕事を与えた。鉢かづきは周りの者に笑われ、からかわれながらも、朝早くから夜遅くまで湯を沸かす辛い仕事をやり続けた。

中將には4人の息子がおり、3人は結婚していたが、4番目の息子は独身であった。宰相と呼ばれる4番目の息子は、見た目や顔立ちが格段に優れていた。ある日、夜が更けてから宰相が湯殿に入った時、鉢かづきの優しい声や手足の美しさに気が付き、これほどたお

やかで魅力が優れている人はいないと宰相は鉢かづきに愛を誓った。宰相は昼間も鉢かづきの元に通い、自分の使っていた柘植の枕と横笛を鉢かづきの元に置いていった。二人の絆は深まっていった。ある時、湯殿の責任者が鉢かづきの声を聞きつけて、頭こそ異様な形だが、目に見える所の美しさを見て、鉢かづきに言い寄りたいと思うが、仲間にかかわれるのを恐れて思い留まった。

宰相と鉢かづきの噂は、宰相の母のところまで聞こえてきた。母は乳母に噂を確かめさせ、事実であることを知ると、鉢かづきに近づかぬよう宰相を諫めるよう乳母に言った。乳母から話を聞いた宰相は、鉢かづきと別れるくらいなら、勘当されてもかまわないと断言した。それを聞いた母は乳母に相談すると、乳母は嫁比べを提案する。嫁比べの話聞いて、鉢かづきは一人で出ていこうとするが、宰相は二人で家を出ていくことを決心する。嫁比べの当日、二人が出ていこうとしたときに、鉢かづきのかぶっていた鉢が前に落ちた。宰相は驚き、鉢かづきの顔の美しさのたとえようもなさになれしくなり、落ちた鉢を見てみると数々の宝物が入っていた。鉢かづきは、「母が長谷観音を信じてくださったご利益」と涙する。

嫁比べに現れた鉢かづきは、兄たちの3人の嫁と比べてもすばらしく、人々は感嘆するばかりであった。3人の兄嫁は姫を笑いものにしようと、和琴を奏でることや歌を詠むことを勧めたが、姫はそれらを見事にやり遂げた。そして、中将は、みんなの前で姫と宰相に自分の領地の大半を譲ることを伝えた。

宰相と姫はたくさんの子どもにも恵まれて幸せに暮らしていた。一方、継母は無慈悲な性格のために使用人も去り、一人いた娘に結婚を申し込む男性もいなかった。夫婦仲も悪くなり、父は当てもなく修行に出かけた。父は継母の言うままに鉢かづきの姫を追い出したことを後悔し、長谷観音に参詣して娘との再会を祈った。

宰相とともに、長谷観音に参詣した姫はそこで修行していた父と再会した。姫の素性を知った宰相は、子ども一人と姫の父を河内国の領主として住ませ、子孫まで繁栄して暮らした。

これは全く長谷観音の御利益だと噂された。
 (『おとぎ草子』現代語訳より要約)

Ⅲ、この話の昔話のタイプについて

ここでは、『おとぎ草子』の「鉢かづき」を昔話「鉢かづき」の一つの話ととらえて昔話の類話を参照しながらこの話の特徴を検討する。

まず、昔話「鉢かづき」について見ておきたい。この昔話は『日本昔話集成』では、「本格昔話」の「継子譚」の中の210「鉢かづき」としてまとめられている。関(1978)はその解説として、「この昔話の記録は少ない。現在の口承の話もあるいは文献によったものではあるまいか(p.190)」と、文献「鉢かづき」が口承され昔話として定着したことを示唆する。

また、関(1978)は、「姥皮」「手無し娘」「お銀小銀」の昔話をあげて、その違いと類似性を論じる。まず、姥皮と鉢の違いについて、姥皮は「亡母から与えられたもので自身は転身しうる呪物」であり、一方鉢の重要な機能は「姫が嫁入りのために亡母が与えた衣裳の入れ物」であり、鉢には必ずしも姥皮的な機能は持っていないとする。そして、「姥皮」はシンデレラ型の昔話であるのに対し、むしろ「鉢かづき」は鉢をかぶるという人とは異なる属性にも関わらず、身分の高い男性に求婚されるという点に「手無し娘」との類似性を指摘する。また、関は、この昔話のテーマについて「お銀小銀」と同様、児童遺棄がテーマではないかも述べている。さらに、「鉢かづきを姥皮と比較するときは、呪術信仰はほとんど見られず、かえって観音信仰が中心となり、姫の頭の鉢が取れ、幸福な結婚に到達しうることをこの信仰に帰している。したがって、この昔話は奇蹟譚(メルヘン)ではなく宗教伝説であり、かえって嫁比べ話でもある(p.190)」と締めくくると。関の挙げた昔話との比較については、今後の章で取り上げて検討したい。

また、稲田(1988)は、210「鉢かづき」を、「むかし語り」の「Ⅷ 継子話」の177「鉢かづき」のタイプとして分類している。このタイプのモチーフは次のモチーフからなる(pp.311-312)。

- 1、病気の母が、娘の頭に鉢をかつがせて死ぬ。
- 2、継母が鉢かづきの継娘をいじめるので、父は娘を船に乗せて流す。
- 3、継娘は入水するが鉢のために浮き上がり、漁師に救われて殿様の火焚きになる。
- 4、殿様の末息子が継娘を恋し、継娘は取れた鉢から

出た衣装を着て兄嫁たちとの嫁くらべに勝つ。

5、継娘は末息子の嫁に迎えられ、幸せになる。

稲田は「(1) 継娘は良家に生まれるか、または申し子であることが多い。呪宝の鉢の背景に神仏の加護のあることをうかがわせる。(2) 後半が姥皮型に展開することもあるが、鉢の呪的な働きが二度にわたるほうが成熟度が高い (p.312)」と説明している。

ATの分類に関して、関はAT327「子供たちと鬼」を、参照タイプとしてAT706「手なし娘」を挙げている。これは関がこの昔話のテーマを児童遺棄と理解したためであると考えられる。一方、稲田はATのタイプをあげていない。稲田はこの昔話をATでは分類できない日本独自のタイプと考えている。

以上、本論で取り上げる話「鉢かづき」は、関の分類、稲田の分類ともに「継子話(譚)」に分類される。

次にタイプからこの話を考察する。関のタイプ、稲田のタイプともに「鉢かづき」に分類される。「鉢かづき」を稲田のタイプ「鉢かづき」のモチーフと比較すると、モチーフ2のエピソードは異なるものの、稲田のタイプ「鉢かづき」のモチーフがそのまますべてあてはまる。その上で、継母の没落と父娘の再会がその後の話として語られる。この後日談を含めてこの話のテーマを考えるなら、関の主張するように、「お銀小銀」同様「ヘンゼルとグレーテル」で代表される児童遺棄がテーマであることもできる。そして、関がこの昔話をAT327に分類するのも頷ける。しかし、この話には、児童遺棄と言うテーマ以上のものがあり、そのテーマがこの話の筋を展開していると筆者は考える。稲田の述べるように、ATでは分類できない独自性があると思われる。その独自性について昔話の類話(註2)、他の昔話も参照しながら、心理学的に考察したい。

IV、誕生

多くの類話では、母が姫に鉢をかぶせるところから始まる。しかし、この話は、姫の誕生前の父母の話から始まる。二人は満ち足りた暮らしをしていたが、子どもがいないことを悲しんでいた。「新しい可能性を願いながら、なかなかそれが得られない状態(河合、1977、p.116)」が物語の始まりに表現される。昔話の始まりの一つのパターンである。

子どもがほしいという願いは昔話の中ではさまざまに表現される。グリム昔話「ハンスはりねずみぼうや」では、子どもがほしいあまり、「ハリネズミでもいいから」と父が呪い、言葉どおりの子どもが生まれる。一方、日本の昔話「たにし長者」では、水神さまに祈り、「タニシでもいいから」と願った通りの子どもが生まれる。子どもがほしいという気持ちは変わらないが、どのように望むかが異なり、その後の話の展開も異なる。日本の昔話の場合、多くは「たにし長者」のように神仏に祈願する。それによって生まれた子どもが偉業を達成する(千野、2013)。いわゆる「神の申し子」である。

この話では、生まれた子どもが長谷観音の申し子とは述べられていないが、両親が長谷観音に姫の幸せを願うという誕生当初から信仰との結びつきが表現される。関(1978)が宗教物語と指摘する通り、信仰とのつながりのある話であると考えられる。類話においても、子のない正直な夫婦が占いによって観音に願をかけて女の子を授かる話がある(「日本昔話通観(以下通観)4」)。

長谷観音は不思議なできごとに関わって昔話によく登場する。昔話が語られていた当時、人々に親しまれ信仰された存在であったと思われる。豊田(2015)によると、長谷観音とは、奈良の長谷寺の本尊で大きな木彫りの十一面観音像であり、その右手に錫杖を持つ地蔵菩薩の要素を持った観音菩薩であるという。そして、慈悲を持ち人々を救う力を持つ観音として、信仰を集めていたという(豊田、2015 註3)。筆者がここで指摘したいのは、長谷寺の観音信仰という特定の信仰についてではなく、このような不思議と思われる話の奥には、人知を超えた力が働いており、そのことを信仰という形で表現しているということである。それがいわゆる魔法昔話のメルヘンと異なる点である。

V、鉢をかづく

姫が13歳の年に、母が病気になり、姫の頭に手箱を載せて鉢をかぶせて、母は亡くなる。

まず、13歳という年齢に注目したい。この年齢は思春期の始まりに当たる。思春期とは、子どもの身体から大人の身体へと変化する時期である。蝶であれば、幼虫から成虫へと変化する間のさなぎの時期である。

子どもとして完成していた身体をいったん壊し新たに大人の身体を作る大変革の時期である。身体の変動に伴い、当然心も大きく変動する。この時期を無事通過するためには人間にとっても蝶のさなぎに相当する強固な守りが必要である。グリム昔話では「いばら姫」を初めこの守りについて述べている昔話が多い(千野、1988)。

現実の世界では、この守りを行うのは母親である。しかし、その母が病気で亡くなろうとする。母は姫を残すことを嘆きつつ、姫の頭に小箱を載せ頭に鉢をかぶせた。類話では、「私がもし死んだらお前は困る、鉢と衣裳を持ってこい」といい、仰山の衣裳を鉢の中に入れて、「私が死んだら鉢をかぶれ」という(関、1978)「娘に欲しい物はなんでも出るといふ鉢を渡して大事にしろと行って死ぬ(関、1978、p.188)」「この鉢をやるから、ほしいと思う物はこの鉢から出るけえ、そじゃけえ、この鉢はもう肌身離さんように持つとりゃ不自由はないけえなあ(「通観17」、p.479)」「一人前になったら鉢がとれるという(関、1978、p.189)」「この宝鉢を譲るがらな。時節が来れば取れるがらな(「通観4」、p.314)」と述べられる。

類話から、母亡き後娘が困らないように、不自由ないようにと、娘を思う親心からのものであることが窺われる。しかし、その親心からかぶせられた鉢は娘が一人前になるまでとることができない。つまり娘は大人になるまで母のかぶせた鉢をずっとかぶり続けなければならない。鉢は母の代わりに娘を守る存在となる。しかし、そこに娘の意志は入っていない。本人の意志にかかわらず、鉢を取ることはできないのである。母を亡くすと同時に、娘は母に与えられた鉢を背負って生きなければならない。娘にとって、この鉢は守りと同時に母が与えた枷でもある。豊田(2015)が「母の呪いともいえなくはない」というように個人的な母の意図があるかもしれない。しかし、その守りの強固さは内側にいる者には何ともしようがなく、蝶のさなぎ、あるいは「いばら姫」のいばらにも匹敵する。ある意味個人を超えた母なる自然の守りといえるかもしれない。話の中では鉢をかぶせたことについて長谷観音のお告げが示唆される。

鉢かづきの鉢の大きな特徴は娘が自分の意志で取り外すことができないことにある。「姥皮」では山の婆が娘に姥皮をくれる。姥皮は危険に遭わないように変

身するための道具であり、娘の意志で自由に脱ぎ着できるのである。鉢も姥皮も母ないし母性的存在から与えられたものであり、女性性を守るものであるが、決定的な違いがここにある。「姥皮」の主人公は姥皮をかぶって危機を逃れるが、そうでないときは姥皮を脱いで本来の娘の姿に戻ることができる。鉢かづきは本人の意志によらず鉢をかついで生きていかなければならない。そこには、母や母を超えた見えない意図が働いていることが示唆されるが、本人にはわからない。むしろ運命ともいえる重荷を背負って生きていかなければならない(註4)。このことこそ、この話のテーマといえるのではないだろうか。

鉢をかつぐことは人とは異なる姿であることを意味する。他者から異質な存在と受け取られ、それによって父に嘆かれ、継母に憎まれ、里人から排除されることがおきる(註5)。しかしそれ以上に、自分が今までの自分とは異なる存在になってしまったこと、自分が自分の異質性を持ち続けなければならない苦しみも大きいと思われる(註6)。

関(1978)は「手無し娘」との類似性について述べているが、森の中で一人の孤独の中で生きる手無し娘に対して、鉢をかぶるために他者から排除されるという人の中にある孤独の苦しみは質の違ったものといえることができる。

Ⅵ、家から出る

継母は父に嘘の訴えをし、それを信じた父は姫を追い出す。この時、継母が姫を追い出すきっかけとしたのが、娘が母の墓の前で泣きながら嘆いたことである。娘が母を思慕するエピソードは昔話の類話には見られない。富田(1998)は娘が母を思慕する点は『御伽草子』の話に共通していることを指摘し、その母子の結びつきにこそ、継母が継子を迫害する理由であるとす(註7)。たしかに継子と実母との結びつきが強いことほど、新しく母となった継母が継子との関係を作る上で脅威になるものはない。初めは関係を作ろうとしていた継母が自分を受け入れない継子を憎むことになっても不思議ではない。継子が母のことを慕っている様子を継母が目撃したという複雑な人間関係から出てくるエピソードである。昔話のモチーフ2からは想像できない心情が物語では語られている。しかし、継

子が願ったものを母の代わりである鳥やハシバミの木が与えてくれるグリム昔話の「灰かぶり」とは異なり、この話では姫が母に苦しみを嘆いても、母からは何の反応も返ってこない。娘の一方的な母への思慕が語られているのである。ここにこの話の母のありようが窺われる。

昔話の類話では、「継母が娘を舟で流して沈めると父親にいう。父親は沈めるのは拒むが船に乗せて流す(関、1978、p.188)」「お父さんの情けで菓子をいっぱい詰めて(「通観17」、p.480)」など、父を介在して継母の追い出しが語られるが、亡き母との関わりでは語られていない。そこでは微かながら父が継母の強硬な姿勢を緩和する役目を果たしている。この父のわずかな優しさが話の結末と通じている。

豊田(2015)は、この思春期は母娘関係が変化し娘にとって母は悪いイメージをもつようになるという。思春期女性の内界では良い母のイメージから悪い母のイメージが布置されて、そのイメージを継母が担っていると考えることができる。悪い母イメージが布置されることによって、娘は母から分離し自立の道を歩むことができる。継子いじめの課題は、昔話の主人公が自立する上でなくてはならないものである。この話では、課題を出すのではなく、家から追い払う排除の形を取る。

Ⅶ、入水

川のそばまで来た時、姫は母のいるあの世に行くことを決心する。この世で頼る者の無くなった姫が頼ることができるのはあの世にいる母だけである。ここでも母への思慕が表現される。しかし、水に入ったものの、かぶっている鉢のために沈むことができない。鉢が姫の自殺を阻止する。このエピソードは、この物語を考える上で重要である。鉢は姫を苦しめるものであると同時に姫の命を救うものでもある。鉢の両義性を意味すると考えられるからである。しかし、姫からすれば、鉢は母の元へ行きたいという一途な願いを打ち砕く否定的なものでしかない。この時姫は鉢のせいで死ぬことができない絶望のどん底にいたと思われる。

しかし、ここが姫の心の展開点であったと筆者は考える。死ぬことができず為す術もなくただ川に流されていく。まさに無意識の流れに任せるのである。これ

はある意味意識を放棄した状態である。そして、船頭に岸に引き上げられる。無意識の中から意識(日常)へと引き上げるのは船頭という男性的な力である。男性ではあるが、水の上で自由に舟を操ることができるという点で、無意識と関わることのできる意識性と見ることができる。ここで姫の中に新たな意識が生じたと考える。それは今までとは違った意識である。母を思慕し頼るばかりの意識ではなく、とにかく自分で生きて行かなければならないという意識である。岸に上げられた姫は再び歩き出す。そこには今の境遇を受け入れる姫の心の在り方がある。それは後に身分の高い男性と結ばれる道へつながる。

昔話の類話でも入水のエピソードは欠かせない。他には「憎まれて川にはまって死にそうになる(関、1978、p.189)」がある。そこにあるのは水(無意識)に入り象徴的に死を体験して生まれ変わるというイメージである。そして、姫を川から救い出し生き返らせるのは船頭や漁夫など男性である。また、「舟で流される」モチーフ2をもつ類話(「通観17」)では、入水のエピソードはないが、このモチーフからは死出の旅が連想される。そして、流されてたどり着いた家で奉公することになる。

鉢が姫の自殺を防いだということに母の意図があったとすれば、母が姫を死ぬことから救ったと同時に、姫が死んで自分の元に来ることへの拒否を示したといえる。ここに前述した母の在り方がよく表れている。例えば娘を案じるあまり娘の思慕にこたえて母の元に娘を呼び寄せようとするかもしれない(註8)。あるいは、母の元から離したくないという母特有の所有欲のために娘の思慕を良いことにして母の元に結び付けようとするかもしれない。どちらも母の個人的なエゴとしての感情である。母の元に来るとはこの場合肉体的な死を意味する。しかし、この母は個人的な母のエゴを超えて、娘の思慕にこたえないという形で娘の生を促し強いている。それゆえ、姫の生きることと生きることの苦しみが続く。この母の在り方は、すでに個人的な感情を超えた母性ということが出来る。しかし、姫にとっては慈愛のやさしさではなく過酷な厳しさである。

Ⅷ、中将と出会う

再び歩き出す姫の姿をみて、周りの人々は姫のこと

を鉢の化物と恐がり、からかい笑いものにする。姫の歩むところは常にからかいや笑いがあり、それが伴奏のように姫につきまとう。その声を聞きながら姫は歩き続ける。鉢は外部から姫を傷つける言葉だけを姫に与え、他者を遠ざける。周囲から疎外された状況が続く。

その時、姫の姿を目に留めて、姫に事情を尋ねる男性が現れる。この地方の国司である中将である。中将は、里人やまわりの人々のように姫をからかったり笑いものにせず、姫を一人の人として尊重し、事情を尋ねる。それに応えて姫は自分のことを語る。この表明の中に姫が鉢をどのようにとらえているかが窺える。母の死後悲しみのあまり鉢が自分の身についてしまい、そのせいで自分のことを恐がる人はいるが憐れんでくれる人はいない。つまり、人との関係を妨げているのはこの鉢であり、周囲の人々だけでなく、父も継母も自分を憐れんでくれないのはこの鉢のためだと思っている。しかし、中将はこの姫の認識を変える。「人のもとには、不思議なる者のあるも、よきものにて候ふ（桑原、1982、p.168）」と姫を家に置くことにしたのである。中将は鉢をかぶっている姫そのままを受け入れる。鉢があっても憐れんでくれる初めての存在である。父、漁師に続いて、ここでは中将という男性が登場する。異質なものを排除するのではなく受け入れる男性的な意識である。恐がりからかう人々で表現される集合的意識とは全く異なるものである。その意識は悪をも受け入れて全体性を目指そうとする動きといえるかもしれない（河合、1982）。

姫は湯殿の火を焚くことになった。姫にとって初めてする慣れない仕事である。ここでも笑いからかわれながら朝早くから夜遅くまで湯を沸かす仕事をする。類話では、風呂焚きの他に釜焚き、飯炊き、火焚きなど身分の低い下働きの仕事が多い。身分の高かった姫が貶しい仕事をするることについて、豊田（2015）は同様に姫の身分から乞食の妻となったグリム昔話の「つぐみの髯の王さま」のお姫様を挙げて、慎ましい仕事を忍耐強くすることの意味を述べている。姫は昔との違いに嘆きつつも、湯殿の火を焚き続ける。そのことが次の展開に続く。

また、風呂焚きは火と関わる仕事である。豊田（2015）によれば、火を扱うことを覚えることは情動をコントロールする術を身につけることだという。さらに、火

を焚くことはさまざまな感情を象徴的に焼きつくす浄化の力も持つと思われる。

Ⅷ、宰相からの求愛

中将の息子の宰相が湯殿で、姫の優しい声や湯を差し出した手足の美しさを見て、姫を見染める。そして、鉢をかぶっている姫を自分のパートナーとする。宰相は、父の中将同様、鉢を被っているからといって、姫を笑ったりからかったりしない。人々で表わされる集合的意識に影響を受けない。鉢で覆われている以外に表れる姫の様子から、姫の本質を見抜く力を持っているのである。類話では、心が優しく姫が苦勞するのを見て手伝い親切にしていたと男性の属性を述べるものもある（「通観4」）。また、毎晩月明かりの下で勉強している姫を見染める（「通観7」）や歌を歌って三味線に合わせている姫にほれ込む（「通観21」）など「姥皮」と同じモチーフである場合もあるが、多くはこの話同様、声、手足からの見染めである。

このことは何を意味するのだろうか。一般に顔は人を認識する上で重要な判断材料になる。鉢をかぶるということは、この重要な要素が見えないということになる。むしろこの話では顔が鉢と認識され、「鉢のお化け」と判断されて、姫は恐がられからかわれることになる。このことは一般的な顔の認識判断を裏付ける。鉢は姫から人々を遠ざける役割をしている。異性を好きになる場合も同様である。顔は大きな一つの判断要素となる。しかし、顔は重要な判断要素であるとともに、顔以外の本質的な判断を曇らせる原因となる。もし姫が鉢をかぶっていなかったら、顔の美しさにひかれてたくさんの男性が姫に言い寄ると同時に、姫の顔の美しさばかりに目が行ってしまい、姫の心の内面まで見ない可能性もある。鉢をかぶり顔を隠すことによって、外見である顔に左右されずに内面の美しさを見られる男性と出会うことができたのである。鉢は姫の顔の美しさを隠し、男性の寄りつきを防ぐとともに、真の姫を愛することができる人に出会わせたのである。

このことを証明するかのようなエピソードが語られる。湯殿の責任者が姫に言い寄ろうと思ったが、鉢のために断念した。姫の本質を大事にするのではなく、一般的基準である外聞を優先する人物である。鉢はそ

のような集合的意識を表す人物から姫を守ったのである。

豊田（2015）は風呂場とは錬金術的変容の起こる場であるとす。また、宰相が姫に置いて行った枕は婚姻の誓いであり、横笛はスピリットであるという。

宰相に求愛された姫は初め彼の熱意のままに宰相を受け入れる。この時の姫は、普通の姿ではない身の恥ずかしさのためただ泣くばかりである。しかし宰相の誠意のある様子に姫は次第に彼の訪れを待ち焦がれるようになる。この場面での姫はきわめて受け身である。鉢をかぶっている身の上がひたすら恥ずかしく、この場から立ち去りたい思いが強い。やっと自分を救う男性が登場したにもかかわらず、それを喜んで受け入れられないのは、鉢のためである。姫にとって、鉢は欠点であり自分の一部として受け入れがたいものであるゆえに人との関係を遮断する。つまり、外の人間を姫に近寄りがたくするだけでなく、姫が外の人間と近しくなることをためらわせるものとなり、鉢は人との関係の障害になっている。しかし、その障害をもととせず関わってくる宰相によって、姫も次第に彼と関わることができ、彼を愛するようになる。

X、鉢が取れる

二人の関係が深まった時その関係を壊そうとする動きが生じる。ここでその役割をするのは宰相の母である。母性的なものが姫に試練を与える。母の立場からすれば、息子が化物に取りつかれているかもしれないとその関係を切る動きがあっても不思議はない。自分の子どもを守りたいという個人的な母性として自然な動きである。しかし、宰相は姫との関係を切ることを断り、親子の縁を切られてもかまわないとまで言う。宰相はきっぱりと親より姫を選んだのである。これは宰相が本当に姫を愛しているかの宰相への試練ともいえる。

その次の試練として、宰相の母は乳母からの提案で嫁比べをすることにする。それを聞いた宰相は二人で出て行こうと言うが、姫は自分一人で出て行くという。今まで宰相に言われるままの受け身であった姫が自分の思いを伝える。これは自分の気持ちを通すものではなく他者である宰相のことを思いやっつてのことである。姫自身の主体性が初めて表現された言葉であると

思われる。それでも宰相は二人で出て行こうと姫に伝える。ついに、宰相も姫も二人で出て行くことを決心して、歩み出そうとした時、鉢が落ちて、姫の美しい顔が現れると同時に、鉢の中から宝物が出てくる。

この場面は、姫の主体的な意志が表明される場面であるとともに、宰相が親より姫を選んだということをも具体化する場面でもある。宰相は親を初め今まで慣れ親しんできたものをすべて捨てて、姫との愛を選んだ。西欧的な戦いではないにせよ、男性側の試練が描かれているともいえる。男女の真の結びつきができた瞬間である。

その時鉢が取れる。グリム昔話の「いばら姫」のいばらが百年という時に開かれて王子を迎えるように、本当のパートナーが現れた時に、鉢が取れたということが出来る。この話では母が信心していた長谷観音のおかげということになる。

豊田（2015）は一人の自立した男性と結ばれる時、本当の呪縛が解けると述べている。

類話でも、鉢が落ちる状況の多くは同じだが、若息子に見染められたはちかつぎが嫁になる時化粧場で「私のような者がこんな家の奥さんになるのはもったいない」といって涙を落すとその時頭の鉢が落ちた（関、1978）、嫁比べの時挨拶したとたん鉢が取れた（「通観4」）があり、姫自身の行為から鉢が取れる話がある。そこからは、姫の謙虚さを窺い知ることができ、それゆえに鉢が取れたと考えることができる。しかし、それ以上にその時が来たために鉢が取れたという印象が強い。河合（1977）のいう心の中で成就される時としてのカイロスである。

鉢が取れるこの場面がこの話のクライマックスである。その後の話は姫がどれほど美しくすばらしいかを描く嫁比べの場面である。ここでは、生前母が授けてくれた様々な教養が発揮される。湯殿で働く時には役に立たなかったものが、ここになって生かされる。

子宝にも恵まれ幸せに暮らす宰相と姫が語られる一方継母のことが語られる。継母の性格ゆえに使用人は去り、しかも実子は結婚相手がいないままである。昔話でよく語られるように継母と実子の母子密着が語られる。悪い継母はあえて罰を与えられるまでもなく、自滅していく様子が語られる。そうなるとうわかっていながらそうせざるを得ないのが継母の性であり役割なのかもしれない。

継母と別れた父は、自分のしたことを後悔し、娘に会いたいと祈願しつつ長谷寺で修行する。そして長谷寺に参詣した姫と再会する。主人公が幸せになった後に、父との再会を語る昔話が多い。否定的母性は排除されるが、否定的母性に加担した父性は許容され取り入れられる。父と娘が出会った場所も長谷寺であり、長谷観音のおかげとされる。

昔話の類話を見てみると、鉢が取れたところで終わりとなるものが多い。昔話の終わりとしては自然な終わり方である。中には、嫁比べで終わるものもあるし、この物語のように嫁比べと父との再会で終わるものもある。また、嫁比べがなく父との再会で終わるものもある。その場合継母のことは父の経緯の流れで語られる程度である。

父と再会し父を引き取るエピソードはバリエーションがある。継母の悪事への加担度の違いだろうか。家に来た盲目の乞食が父だとわかり家で使う（関、1978）。乞食坊主になった父と出会い、やさしい鉢かづきは父を屋敷に連れて帰った（「通観4」）。寺参りで庭掃除をしている父に再会し、父が舟を沈まないように助けてくれたおかげで今の自分があると父を家に連れ帰り養う（「通観17」・関、1978）。最後のエピソードは、モチーフ2とつながるエピソードである。

XI、鉢の意味

まず、姫を取り巻く登場人物について整理しておきたい。実母、継母、宰相の母の母性と、父、船頭、中將、宰相の父性・男性である。継母は父に嘘をいい姫を追い出し、宰相の母は宰相との仲を引き裂こうとする。それに対し、継母の嘘を信じて父は姫を追い出した（類話では、継母の迫害を緩和する役割を果たす）が、船頭が流れてきた姫を岸に引き上げて、見つけた中將が屋敷に置いて、宰相と出会う。母性は姫に困難を与えるものであり、それを救うのは男性であった。死ぬほどの苦しい試練を与える母性とそれに対して援助する男性を経て、姫は最終的にパートナーとしての男性と出会う。この話においては、母性的人物と男性的人物との役割の対比が興味深い。母性が否定的に働く時、男性的なものが補償的に肯定的に働くことをこの話は教えてくれる。また、母性が姫の成長のために辛い環境を姫に与えて、その姫を助ける存在として男性を登

場させたかのようにも受け取れる。この母性に当たるものが鉢の役割であったのだろうか。

さらに鉢の意味を深めるために織田（1993）の論を挙げて考えたい。

織田（1993）は「新しい視点による女性の心の発達仮説」として、6段階の発達段階をあげる。その第5段階の「仮面によって守られた変容の器の段階」において、「仮面に守られて、なお未分化で未成熟な女性が、成熟分化の過程を歩む。（中略）娘は仮面の中で、悲しみや淋しさなど困難でマイナスの側面を生きさせられる（織田、1993、p.61）」という。織田（1993）は女性の心の成長には、深い悲しみを生きることが不可欠であると、「鉢かづき」の物語を取り上げる。そして、鉢かづきの鉢は、仮面であるとともに容器であるという。仮面の裏側で悲しむ女性を生きることによって対等な結婚を成就できるように女性は変容を遂げるといふ。

織田（1993）は仮面の心理学的意味としてユング心理学の仮面（ペルソナ）の概念に独自の視点を加える。すなわち、人に元型的な生き方を強制するとともに守りの役割を果たすという。鉢かづきの場合、この鉢が「一方では娘鉢かづきの少女から女性への成長に、他方では母親的なものによる守りと密接に関係している（織田、1993、p.116）」と述べる。

織田（1993）は鉢かづきの鉢の意味について（1）元型（註9）としての強制力、（2）外界の遮断と内界との関わりとの促進、（3）仮面を身につけた者にたいする守り、（4）変容の器としての働き、（5）心の全体性を達成させるための仮面、（6）隠れるための場所の提供、（7）仮面が表わしているものへの同一化の7つを挙げる。

以下にその説明をまとめる。

鉢は姫に元型的な生き方を強制する。鉢を取り去ることができないのは、鉢が仮面として元型的な強制力をもつからである。個人の母は死ぬことによって関係を断つが、元型としての母は仮面としての性質を持つ鉢によって鉢かづきを守ろうとして彼女を環境から遮断する。そして、鉢は外界を遮断し鉢かづきを内界に向かわせ、内界との関わりを促進させる。そこで自分の感情や苦しみに目をそむけずに直視する。鉢は元型的特性ゆえに一方では守りの要素を持ち他方では自殺企図の原因にもなる。鉢かづきは自らの悲しみに向き

合い少女から女性へと変容を遂げる。鉢が変容の器として守られた場を作る役割を果たす。また、身分の高い姫が仮面としての鉢の中で湯殿の下女を生きることが心の全体性の達成と考えることができる。鉢は守るとともに隠れる場所を提供し、鉢の中に隠れることによって、内なる異性との関わりを深めることができる。鉢かづきは鉢で表わされる元型的現実と同一化し、元型的現実を生きだす。鉢の様々な意味の一つにすると容器としての女性ということができ、容器としての女性を強制されて生きることが、鉢かづきの生涯の大切な段階となった。

以上が織田の鉢の意味の説明である。織田が意味づけるように鉢の意味や機能は多様であり、矛盾した両義性を持つ。鉢を元型ととらえることによって、元型的特性として強制力や両義性を持つことが理解できる。筆者は前述したように、織田のあげる鉢の役割の中で特に重要なものとして守りと変容を挙げたい。

織田(1993)は、鉢で表わされる元型としての母の束縛からの自由を獲得する必要があると述べる。この強制力から解放されるためにパートナーとの対等な男女関係の成立とウロボロスの(註10)両親とのある種の対決が必要であると述べる。ここでいう対決とは二人が宰相の生家を捨てて出ていくことである。その時鉢が落ちる。すなわち束縛から解放されたという。

織田は発達のための対決の必要性を説く。確かに、宰相と姫が今までのすべてを断ち切って家を出ることは明確な自立であり、そのことによって鉢が取れたのは事実である。しかし、筆者はその行為によって鉢をかぶっていないと必要が無くなったために、自然に鉢が取れたと考えたい。この鉢が心理的、象徴的意味にも受け取れるからである。まるで人を苦しめる心の症状のように。姫からすれば苦しむ以外何もない症状でしかなかった鉢が取れたのは、長い苦しみの末に、パートナーとしての男性と出会えたためではないだろうか。

XII、終わりに

本論は、説話『御伽草子』の「鉢かづき」を取り上げ、昔話として解釈を試みた。昔話の類話の少なさはあるが、昔話同様の検討をすることができた。描写の細やかさや技巧を凝らした表現など昔話にはない説話

ならでは特徴が見られた。そのおかげでより細やかに心情を理解することもできた。一方説話ではあるが、昔話としての物語展開があり、昔話として他の昔話との比較検討を行うことができた。

最後に、関(1978)が「鉢かづき」を宗教伝説と述べたことについて触れておく。この話には、長谷寺の観音信仰の御利益であることが強調される。確かにこの話の展開の中で不思議なことが起きているのは事実である。この不思議を魔法として理解するのではなく、信仰の結果であると語ることが、日本の昔話の特徴とすることができる。

註1：日本ユング心理学研究所 2014 年度冬学期講座 セミナー 156 <日韓共同女性のこころを考える昔話 セミナー> 「母と娘の問題を考える」での豊田園子先生の講演である。本論文で引用するのはこの講演の内容からである。筆者の聞きによる。

註2：類話として、参照するのは、関(1978)の類話として収録されている話と稲田(1988)が、タイプに載せている資料篇(「日本昔話通観」)に収録されている話から取り上げる。

註3：豊田(2015)は、聖母マリア、特に地母神信仰と習合した黒マリア信仰と近いものがあるとしている。また、西郷(1993)は、長谷寺の観音を取り上げて、観音が地母神の性格を根底に持っていることを論じている。

註4：昔話の類話では、生まれた時から鉢をかぶっているという話もある(関、1978・「通観9」)。また、鉢を娘の意志で脱ぐことができるという類話もあり、その場合は姥皮的な展開をたどる。

註5：廣澤はいじめをテーマにこの話を解説している(大野木ら、2009)。

註6：本文中に姫が母の墓前で自分の苦しみを述べる個所がある。鉢がついたことを嘆く。

註7：富田(1998)は「鉢かづき」に登場する人間関係を分析し、鉢は鉢かづきと実母との精神的結びつきの強さを表すものであると論じている。

註8：後藤は死んだ母が自分のいる天に娘を迎えたという継子いじめの話を載せている(大野木ら、2009)。

註9：織田(1993)は「元型とは心の深層にあって人の生き方を根底のところで基礎づける骨格的な構造

で、ユングによって提唱された深層心理学上の仮説である (p.123)」と説明し、元型の持つ特性である対極性と多様性 (複数性) について論じている。

註 10: 時に秩序や文化に対する混沌や自然を表すという (織田、1993)。

引用文献

- 稲田浩二 (1988). 演習版・日本昔話タイプ・インデックス 同朋舎出版.
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編 (1994). [縮刷版] 日本昔話事典 弘文堂.
- 稲田浩二・小澤俊夫編 (1977-1990). 日本昔話通観 第4巻、第7巻、第9巻、第17巻、第21巻 同朋舎.
- 河合隼雄 (1977). 昔話の深層 福音館書店.
- 河合隼雄 (1982). 昔話と日本人の心 岩波書店.
- 桑原博史全訳注 (1982). おとぎ草子 講談社.
- 織田尚生 (1993). 昔話と夢分析—自分を生きる女性たち— 創元社.
- 大野木裕明・千野美和子・赤澤淳子・後藤智子・廣澤愛子 (2009). 昔話ケース・カンファレンス—発達と臨床のアプローチ— ナカニシヤ出版.
- 西郷信綱 (1993). 古代人と夢 平凡社.
- 関敬吾 (1978). 日本昔話大成第5巻 本格昔話四角川書店.
- 千野美和子 (1988). 思春期における守りのありかた 山中康裕・斎藤久美子編 臨床的知の探求 下 創元社 pp.63-82.
- 千野美和子. (2013). 日本昔話「たにし長者」にみる精神性 京都光華女子大学研究紀要第51号, 13-24.
- 富田成美 (1998) 『鉢かづき』の母子像—「鉢」に見る「絆」— 日本文学 47 巻 9 号, 19-29.